

パリにおけるホー・チ・ミン：ベトナム民族解放運動の起点

HEMMI, Shigeo / ヘンミ, シゲオ / 逸見, 重雄

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

18

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

1972-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017926>

パリにおけるホー・チ・ミン

——ベトナム民族解放運動の起点——

逸 見 重 雄

まえがき

一九六九年九月三日、世界中の人民から愛惜されて、波瀾に満ちた七十九年の生涯をとじたベトナム民主共和国主席ホー・チ・ミン⁽¹⁾は、ベトナムにおける最初の共産主義者であった。

今次世界大戦（一九三九―四五年）の中からアジアで最初に産声をあげたベトナムの「八月革命」（一九四五年）は、ロシアの「十月革命」の相続者であり、ベトナム民主共和国政権は、その本質においてプロレタリア独裁政権であった。この革命を指導したインドシナ共産党（一九五一年ベトナム労働党と改称）は、コミンテルン（一九一九―一九四三年）のベトナム支部であり、ホー・チ・ミンがコミンテルンの委嘱をうけて創設したものであった。

ベトナムは、民主主義革命と社会主義革命との二つの革命を経て社会主義陣営へ移行した。革命の指導者はこの民

パリにおけるホー・チ・ミン

主義革命を民族民主人民革命と呼んでいるが、労働者階級の指導のもとで行われるブルジョア民主主義革命のこと、ベトナムでは、右の二つの革命（生産関係の变革）が一つの政権のもとに行われ、北ベトナムでは一九六一年から社会主義建設五カ年計画の実施に入り、あの烈しい北爆下でもその体制を崩さず、今もなお崩していない。

ベトナムにおける労働者階級前衛党の創設は、中国共産党のそれにおくること九年である。しかも中国人民革命（一九四九年）に先んじて、独立の偉業を成し遂げた。このことは、ベトナム民族民主革命の最高の指導者ホー・チ・ミンの伝記、その闘争経歴を明らかにすることなくしては理解できない。

レーニンは、民族＝植民地問題についてマルクス主義に新しい分野を開いた。マルクス時代の「万国の労働者団結せよ！」の標語はレーニン時代の「万国のプロレタリア、世界の被抑圧民族団結せよ！」のそれにかわった。レーニンの忠実な弟子であり、ベトナム人民の子であるホー・チ・ミンは、レーニンの民族＝植民地問題の原則を半封建的植民地国ベトナムへ適用し見事に結実した。ベトナム民族の勝利は、またマルクス＝レーニン主義の勝利でもあった。

ホー・チ・ミンには長い海外での活動期がある。ベトナム労働党史研究会の出した『ホー・チ・ミン主席』(President Ho Chi Minh, —Political Biography) によればホー・チ・ミンの政治活動を六つの時期にわけて考察している。

- 一、少年期（一八九〇年生誕——一九一一年）
- 二、海外での活動期（一九一二——一九二四年）
- 三、党設立運動期（一九二五——一九二九年）
- 四、地下活動期（一九三〇——一九四五年）

五、抵抗戦争期（一九四六—一九五四年）

六、現在（一九五四—一九六〇年）

この本は、一九六〇年（ベトナム労働党第三回全国大会の直後）に公刊されたもので『正伝ホー・チ・ミン』（邦訳本一九七〇年）とは、若干喰い違った時期的区分ではあるが、同じく正史である。前者によるとホー・チ・ミンの海外活動期は、一九一二年から一九二四年となっているけれども、彼の海外活動期はもっと長い。ホー・チ・ミンは、一九一一年祖国を去ってから、一九四一年祖国へ潜入するまで、三〇年間を海外で活動している。祖国を去ったのは二〇才のときで、祖国へ帰ったのは恰度五〇才であった。その間、当初は海員として三大陸の各地をめぐり、その後比較的長年月滞ったのが、パリ、モスクワ、広東（広州）ベトナムの周辺であった。ホー・チ・ミンはパリ滞在中にフランス社会党員となり、同党が一九二〇年の「トゥール大会」で分裂したとき彼は党のコミンテルン加盟に賛成の多数派に同調して一票を投じ、この時からフランス共産党員となった。だから、この年から祖国へ帰るまでの二〇年は、共産主義者としてのホー・チ・ミンの海外活動に属する筈である。従って、ホー・チ・ミンは、フランス共産党を初めとして、ソ連邦共産党、中国共産党と深いかかわりをもっていた。ベトナム民族解放闘争史が、叙上の三党の影響をうけていることは争いない事実である。わけてもホー・チ・ミンの生来の愛国精神が、マルクス主義の洗礼をうけて輝きをますのはパリ滞在中の出来ごとである。

パリは、革命の中心地、亡命者の寄航地といわれている。プロレタリア独裁政権の萌芽とされる一八七一年のパリ・コミューンの失敗の経験は、ロシアの一九一七年十月社会主義大革命勝利の大きな教訓となった。レーニンは、一九〇五年のロシア革命後の反動期の一九〇八年から一九一二年までをパリで過した。四十才前後の時である。レ

ニンは、ロシア社会民主労働党ボリシエビーク派の首領として、パリからボリシエビズム再編成の指揮をとった。ホー・チ・ミンがパリに滞在した期間は一九一七—一九二三年で、その間に、彼はフランス社会黨員から共産黨員となつて活動している。そしてこの間に、プロレタリア前衛党の指導なくしてはベトナムの独立は不可能であることを知つた。前記ホー・チ・ミンの政治活動期の六つの時期区分では、党設立運動期は一九二五年から一九二九年となつてゐる。それは、彼がソ連邦と中国、特にベトナム周辺にいた時期で、国外から党設立の指導に当たったとき、むしろ党設立準備期であつたと思う。そして、その準備期の前の段階がパリ時代であつて、ここにホー・チ・ミンの創造的マルクスレーニン主義への思想的転換が行われた。この転換がベトナム民族解放運動にとつても、世界の被抑圧民族の解放運動にとつても重大な政治的・国際的意義をもつものであつた。この意味において、私は、ベトナム民族解放運動の起点をこのパリ時代に求めたいと思う。

本稿はⅠで、パリにおけるホー・チ・ミンのフランス社会党・共産党のメンバーとしての活動の概略を示し、Ⅱでブユイ・ラムの⁽²⁾回想記を邦訳して示す。そして最後に、「私のホー・チ・ミン研究」と題する一文を添加してホー・チ・ミン研究に要する邦語文献の紹介をしたいと思う。Ⅰではホー・チ・ミンの思想転換の過程に重点をおき、Ⅱではブユイ・ラムの環境描写を借用する。したがつてⅠとⅡとは文章上の脈絡はない。これを結びつけて『パリにおけるホー・チ・ミン像』を制作する仕事は、読者に残されている。

(1) ホー・チ・ミン (Ho Chi Minh) は、漢字では胡志明とかく。パリ時代から用いられたグエン・アイ・クオック (Nguyen Ai Quoc) は漢字で阮愛国である。グエンはホー・チ・ミンの本名であるが、アイ・クオックは、パリ時代からの変名である。彼は一九四二年八月二十九日から、ホー・チ・ミンと改名した。運動中色々な変名を用いているが、グエン・ア

イ・クオック・ホー・チ・ミンが本筋である。

(2) ブエイ・ラム (Bui Lam) については、一九六六年、パリのマスペロ社発行の《Récits de la Résistance Vietnamienne》で、現在ベトナム高等法務院副主席、ドイツ民主共和国におけるベトナム民主共和国代理大使と紹介されている。本稿で用いた「回想記」は「パリでホーおじさんに会う」と題し Vietnam Courier 1969, No. 241, 242 に連載されたものに拠ったが、同じものが、同じ題下に一九六二年ハノイ外文出版社から出された《Days with Ho Chi Minh》に載っている。前記のマスペロ版の『ベトナム抵抗運動物語』では「パリにおけるホー・チ・ミン」と題して同文のものが仏訳され、当時のパリの雰囲気うかがわれて面白いので全訳紹介することにした。

I

一九六〇年四月、レーニン生誕九十年記念号ソビエト誌『東方問題』に、ホー・チ・ミンは「私をレーニンへ導いた途」(ハノイ外文出版社「英訳ホー・チ・ミン選集」第四卷四四八頁、坂本・大類編訳「解放の思想」三五三―三五六頁)という論文をよせ、次のようにいっている。

「第一次大戦のあと、私はパリにいて、あるときは写真屋の修正士として、あるときは「中国古代品」(フランス製)の絵描きとして暮しをたてました。私はベトナムにいるフランス人が犯している数々の犯罪を非難した小冊子を配布しようとしてました。その頃、私は十分な歴史的な重要性をつかむことなしに、ただ本能的に十月革命を支持しました。私はレーニンを愛し讃めました。レーニンはその同胞を解放した偉大な愛国者だからです。私はその時までに、彼の本を一冊も読んでいませんでした。

私がフランス社会党へ加盟したのは社会党の『紳士淑女』―私は自分の同志を当時こう呼んでいました―の皆さんが、私に同情し、被抑圧人民のたたかいに同情を示してくれたからです。しかし、私は政党や労働組合が何で

あるか、社会主義や共産主義が何であるかについては、全然理解していませんでした。

社会党の支部では、社会党が第二インタナショナルにとどまるべきか、第二半インタナショナルがつけられるべきか、社会党はレーニンの第三インタナショナルに参加すべきであるかについて、激しい論争が行なわれました。私は一週間に二度か三度、定期的に会合に参加し、論争を注意してききました。第二、第二半、あるいは第三インタナショナルのどれでも革命はやっていくことができるではないか。何のため議論しているのだろう。第一インタナショナルというのは、どうなったのだろうか。

私が最も知りたかったこと——そして集会でもハッキリと討論されなかったことは、どのインタナショナルが、植民地諸国の人民の側に立っているのかということでありました。それは第三インターであって第二インターではない。それから一人の同志が、それを読むようにといって、ユマニテ社から出版された『レーニンの民族および植民地問題に関するテーゼ』をくれました。

このテーゼには、当時の私にとって理解するのに困難な政治用語がありました。しかしくり返しくり返し読んでおかげで、私はその主要なところを理解することができました。何という強い感動、熱情、鋭い洞察、確信が、私の中へ泌みこんできたことでしょうか。狂善のあまり、私は涙がでました。私は一人で部屋に坐っていたのですが、まるで大群衆によびかけられるように大きな声でどなりました。『ああ殉教的な兄弟！ これこそわたしがもめていたものだ。これこそわれわれの解放への道だ！』

それから後、私は完全にレーニンを信じ第三インタナショナルを信じました。

前には、党支部の会合で、私は討論を聞いていただけでした。私はみんな論理的だ、誰が正しくて、誰がまちが

ってるか、区別できない、というような漠然とした考えを抱いていました。しかし、レーニンのテーゼを読んでからは、私も討論のなかにとびこみ、熱情をこめて論争しました。私は自分の考えを十分に表現するだけ、フランス語をおぼえていなかったのですが、レーニンや第三インターナショナルを攻撃するような主張に対しては、断乎としてぶつかってゆきました。私の第一の論拠は、こういうことでした。「若しもあなたが植民地主義を非難せず、もしもあなたが、植民地人民の側に立たないというのであれば、いったいどんな革命をあなたはやろうというのですか」。私は自分の党支部の集会に参加しただけではなく、『自分の立場』を固めるために、他の党支部へもできていきました。いま、私は同志マルセル・カシャン、ヴァイアン・クーチュリエ、モンムッソーその他の人たちが、私の知識をひろげるために、どんなに助けてくれたか、ということをもう一度いわざるをえません。

最初、共産主義ではなく、愛国主義が私をレーニンと第三インターへの確信に導いてくれました。それから一步、闘争にそって、マルクス・レーニン主義の学習と併行して実際の活動に参加しながら、私は徐々に、社会主義と共産主義だけが、被圧迫民族を解放し、全世界の労働人民を奴隷から解放できるのだ、という事実には到達しました。

私の国にも、中国と同じように不思議な『賢者の本』についての伝説があります。大きな困難にぶつかったとき、この『賢者の本』をあけると、解決の途が見つかる、というのです。レーニン主義は不思議な『賢者の本』というだけではありません。それはベトナムの革命と人民にとっての羅針盤です。そしてまた、それは究極の勝利への途、社会主義と共産主義へのわたしたちの途を照らす、さんさんたる太陽であります。

レーニンの『民族と植民地問題』のテーゼが決議されたのは一九二〇年、コミンテルンの第二回世界大会（モスク

ワ)においてであった。それは『農民問題のテーゼ』と一緒に提出されている。この年の暮のフランス社会党第十八回大会(トゥール)で、フランス共産党が誕生した。ホー・チ・ミンは、この時齡すでに三十であったが、アジアにおけるプロレタリア革命運動家で、こんなに早い時代に、レーニンの『民族と植民地問題』に開眼した人物は、他に
あるであろうか!

ホー・チ・ミンは、一八九〇年五月三十日農民出身の愛国的な儒者の家庭に生れた。ホー・チ・ミンの出生地ゲアン省ナムダン県は、古来愛国的知識人が多数輩出した土地で、彼の兄も姉も反仏運動に参加して投獄されている。このような愛国主義家庭に育ったホー・チ・ミンは、十五才のときから秘密活動に参加し、愛国的な儒者たちのため、連絡員として活躍していたが、この若さで、ファン・ボイ・チャウ(潘佩珠)による東游運動で、ファンが王位復権運動に点火するのに官人権力者に依存したり、皇太子を蜂起の首魁に推挙したり、主として日本の援助に頼ったりする政策には批判的で、日本に学ぶことには信をおかなかった。一九一〇年ユエの高等学校を中退し、それから愛国的知識人のつくった私立学校で教えた後、一九一一年祖国解放の道を求めてヨーロッパへ向った。ヨーロッパの人民がどのようにして強固な独立国をつくったかを学び、帰国して同胞を援助し、フランス植民地主義者を追出そうという大願をいだいての旅であった。二十才のときである。

ホー・チ・ミンは、最初フランスの運輸会社に所属する商船のボーイとして働いた。その後各地をまわったが最初にフランスへ渡った。文明国フランスの東玄関マルセイユについたホー・チ・ミンは、貧困な労働者、売春婦、動物扱いされている黒人など、文明の名に反する光景を見た。フランスでは、はじめはフランス人の家庭の下僕をやったが、まもなく、他の仏領植民地を見るためにアフリカ廻りの船乗りになって、アルジェリア、チュニジア、東部アフ

リカ諸国、コンゴへと旅をした。船が港へ着く度に、同僚たちはみな、歓楽の巷へ出かけてゆくのに、彼だけは、その土地の風俗や住民の生活状態などの観察に時を費やした。彼が仏領アフリカ植民地で見たものは、祖国の同胞のそれと同じように、植民地主義者に搾取され、苦しみにあえいでいる住民の悲惨な生活であった。

アフリカ旅行のあと、ホー・チ・ミンは『英語の勉強のため』と称してロンドンへ渡った。ここで彼は学校の雪かき人夫をしたり、ボイラー・マンをしたり、ホテルの皿洗いをしたりして生活費を稼ぎながら文明国イギリス社会を観察した。資本の軛のもとで呻吟するイギリス労働者の姿、わけてもアイルランド人民の勇敢な独立闘争がホー・チ・ミンの注意をひき、彼を感動させた。

第一次世界大戦がはじまるとホー・チ・ミンはフランスへ帰った。この頃、彼はグエン・アイ・クオックと名を変えた。この戦争中、ベトナムの人民は、フランスの植民地支配に対して幾度となく立上った。一九一六年のヅイ・ダン（維新帝）の蜂起、一九一七年タイ・グエンでの武装蜂起などがそれである。しかし、これらの蜂起はいずれも無惨な失敗に終わってしまった。こうした祖国での独立闘争弾圧の報に接したホー・チ・ミンの胸には、祖国解放の決意がいつそう強くなっていった。

ついで彼は、アメリカ社会の研究のため大西洋を渡った。この国で彼がみたものは、キュー・クラックス団（K・K・K）であり、黒人リンチの惨状であった。

戦争の終りに、ホー・チ・ミンはパリへ戻った。この頃パリでは、民族自決、自由、民主主義をうたったウィルソンの十四箇条の平和原則が大きな関心を呼び起していた。一九一九年二月八日ベルサイユで開かれた平和会議に、ホー・チ・ミンは次の八項目からなる『ベトナム人民の要求書』を提出した。

パリにおけるホー・チ・ミン

- 一、ベトナム人政治犯の大赦。
 - 二、ベトナム人にフランス人と同等の権利を与えよ。ベトナムの愛国者迫害の機関である刑事裁判所の廃止。
 - 三、言論と思想の自由。
 - 四、結社と集会の自由。
 - 五、行動と海外旅行の自由。
 - 六、教育の自由とベトナム人のため技術、職能学校の開設。
 - 七、制令に代る法律制度の設置。
 - 八、ベトナム人民の利害に関する問題を解決するためフランス政府の近くにベトナム代表を置くこと。
- だが、この会議は当然のことながら、植民地人民の要求に耳をかさず、帝国主義列強間での戦利品分捕会議に終わった。植民地人民の失望と憤激は、たとえば、中国の五・四運動となつて爆発している。ベルサイユ平和会議は、ホー・チ・ミンに「人民が解放を望むならば、人民自身の力に頼らなければならぬ」という教訓を与えた。
- ホー・チ・ミンはパリでは写真修正業の収入でぎりぎりの生活をしながら祖国独立のための勉強と活動をやっていた。だが、当時の彼は熱烈な愛国者ではあったが、政治、政党、労働組合などにつき、その何たるかを理解していなかった。フランス語はどうか話せたが、書く方はだめで、友人のファン・ヴァン・チュオンに頼⁽¹⁾んでいた。しかしこれでは自分の本当にいいたいことを表明できないもどかしさがあった。この頃パリでグエン・アイ・クオックの『ベトナム人民の要求書』をとりあげてくれた唯一つの新聞に「ル・プープル」(人民)があった。編集長はマルクスの甥で国会議員でもあった社会主義者のシャルル・ロンゲであった。ホー・チ・ミンはロンゲを訪ねたが、生れて始めて

「親愛なる同志」と呼ばれて驚いた。ロンゲは、ベトナムで行われている不正義についてフランス人民を啓発するために「ル・プープル」に書くよう彼にすすめた。ホー・チ・ミンは、ロンゲの手引きでフランス語で文章を書くことを学んだ。最初のうちは六行、そして七行、八行と次第に長く書けるようになった。するとロンゲは「もっと簡潔に、もっと短く」と指導した。ホー・チ・ミンのあの簡潔で要をえた文体はこのころの修業の賜物であろう。

少年の頃から文学書を愛読したホー・チ・ミンは、此頃になると英語でシェクスピアやディッケンズを、中国語で魯迅を、フランス語でユゴーやゾラを読んだか、彼の文学的経歴に決定的影響を与えたのはアナトール・フランスとレオン・トルストイであった。ホー・チ・ミンは、ユマニテ紙にいくつかの小説を書いたが、植民地博覧会に際して、カイ・ディン帝（バオダイの父）のフランス訪問を皮肉くった詩劇『竹龍』は上演禁止を喰いながら、進歩的クラブで喝采をあげた。彼は暇を見ては美術展をみにいった。そうした中で、一九二五年パリで出版され、一九六〇年ハノイ外文出版社から出された選集に再録されている選集中の圧巻『フランス植民地主義を告発する』と題するフランス帝国主義の実証的研究が進められていた。

一人のベトナム人が全世界に向って独立という自分たちの見解を宣言したのであるから、また一人のベトナム人がパリでフランス植民地主義者の罪悪を暴露したのであるから、グエン・アイ・クオックの名は、同胞の渴仰の的となり、フランス政府の憎悪の的ともなった。植民地主義者は、彼にスパイをつけたり、中傷したり、脅迫したり、店主に彼を雇わぬよう命じたり、彼を買収しようとしたりした。時のフランス植民相アルベル・サローとインドシナ総督ピエール・パスキエとは、彼を個人的に招いて脅迫したり、警視総監は彼のパスポートをとりあげたりした。だが、ホー・チ・ミンの信念は微動だもしなかった。

これより先の一九一八年、彼はフランス社会党に入党した。『わが国を守ってくれるフランスの唯一の組織であり、フランス革命の高邁な理想たる自由、平等、博愛を追求する唯一の組織であるから』がホー・チ・ミンが入党の理由であった。フランス社会党は、マルクスの生存中、ジュール・ゲードやポール・ラファルグ（マルクスの婿）がロンドン（マルクスやエンゲルスの居た）との交流のもとにその綱領をつくったフランス労働党の後身であり、大戦前から第二インターナショナルに属していた。ところが、戦争がはじまると第二インターナショナル加盟各国の多くの党の指導者は、バーゼル大会の反戦決議を破って、ブルジョア政府の戦争政策に同調し参戦し、『祖国防衛』の徒と化した。ただひとり、ロシアの社会民主労働党だけが「帝国主義戦争を内乱へ」の標語をまもって反戦斗争を全うした。その結果が一九一七年十月革命の勝利であり、プロレタリア独裁政権の樹立であった。世界を震撼させたロシア革命は、フランスの労働者階級にも深刻な影響を及ぼした。とくに第二インターナショナルか、第三インターナショナルか、あるいは第二半インターナショナルか、をめぐってフランス社会党内で激しい論戦が交わされた。マルセル・カシャンとヴァイアン・クーチュリエは「ユマニテ」紙によって、第三インターへの加盟を主張し、レオン・ブルムとポール・フォールは「ル・プール」紙で第二インター加盟を説き、第二半インター派は「ラミ・ド・プール」（人民の友）紙で論陣を張った。討論会も毎夜開かれ、各派いずれも堂々の論陣を張って互にゆずらなかつた。ホー・チ・ミンもこの討論会には欠かさず出席したが、政治学、経済学、哲学にはまだ弱かつた。一九二〇年十二月、この論戦に終止符を打つべき歴史的なフランス社会党第十八回全国大会がトゥールで二十五日から三十日にかけて開催された。マルセル・カシャンの率いる多数派は第三に、レオン・ブルムの少数派は第二に投票した。そしてホー・チ・ミンは躊躇せず第三インターに一票を投じた。理由はきわめて簡単であつた。第二インター派が植民地問題について一言も

ふれていないのにたいして、第三インター派は植民地の被圧迫民族を支持し、自由と独立の回復を援助すると約束したからである。これからみてもわかるように、この当時のホー・チ・ミンは、熱烈な愛国青年、民族主義者ではあつてもまだ革命的マルキストには成長していなかった。フランス社会党の第三インター派は、この大会を機として、フランス社会党から分離してフランス共産党を結成し、ホー・チ・ミンはベトナム人で最初の共産党員となった。本項冒頭のホー・チ・ミンの回想記はこの時のことを述べている。

一九二一年、ホー・チ・ミンはフランス共産党の支援をえて、当時フランスで活発に動いていた仏領植民地諸国の革命分子とフランス人のシンパサイザーとを包含した「植民地民族連合会」を組織した。連合会は執行委員会をおき、機関紙（週刊）「ル・パリア」（貧民の意）を発行した。編集、会計、配布その他一切の業務はホー・チ・ミンが引きうけた。以後、彼はル・パリア紙を中心に、フランス植民地主義の罪状をあげ、植民地問題についてフランス本国労働者階級の開眼を促し、かれらと植民地被抑圧人民との団結闘争の必要を説き且つ訴え続けた。ル・パリア紙はそれまで互に孤立して生活していた在仏ベトナム人たちを次第に組織していった。この新聞はベトナム人船員たちの手で秘かに祖国ベトナムへ運ばれ、ベトナム人民に多大な影響を与えた。ベトナムの人民は、ル・パリア紙を通じて、ソ連邦、マルクスレーニン主義の何たるかを知るにいたつたのである。ホー・チ・ミンはル・パリア紙の外にも、フランス共産党機関紙「ユマニテ」（カシヤンはその編集長であつた）、「コレス・ポندگان・アンテルナショナル紙」、「ラ・ヴィ・ウーブリエール紙」（労働総同盟機関紙）においてマルクス・レーニン主義の立場から植民地問題を論述した。

一九二三年六月、ホー・チ・ミンは秘かにモスクワへ向つた。この年の十月十六日に開催された「国際農民会議」に出席するためである。彼はこの会議で、植民地農民の代表として農民インタナショナルの執行委員に選出された。

彼が植民地被抑圧民族解放の父と仰ぐレーニンは、一九二四年一月帰らぬ人となった。ホー・チ・ミンはレーニンの亡くなった同じ年の六月十七日から七月八日にかけてモスクワで開かれたコミンテルン第五回大会にフランス共産党並に植民地諸国民代表として「民族および植民地の諸問題」について報告し、帝国主義世界体制内の四つの基本的矛盾の一つ、帝国主義と被抑圧諸民族の対立の面を強調し、各国共産党が民族問題、植民地問題により一層の関心を示すよう訴え、以後コミンテルンの極東局南方部門を担当し、名実共に、プロレタリア国際主義の戦士となった。だから社会・労働運動史の上で、ホー・チ・ミンが、パリ滞在中に民族主義からマルクスレーニン主義へ移ったことは重大な意味をもっている。

植民地主義者らはパリにおけるホー・チ・ミンの活動にひどく悩まされていた。ホー・チ・ミンを投獄するか追放するかしたくてたまらなかったに違いない。しかし、それができなかつたのは、与論がこわかつたのである。ホー・チ・ミンは社会党の下院議員や弁護士と殆ど全部を知っていたので、彼等はすすんでホー・チ・ミンを擁護する筈であつた。その上ホー・チ・ミンは何も悪いことをしなかつた。ホー・チ・ミンが祖国を防衛し植民地主義の犯罪を告発したことは、仏領インドシナでは死刑の罪状であつたとはいえ、フランス本国では違法ではなかつた。多数のベトナム人愛国者は、ホー・チ・ミンにくらぶくもない活動で首をはねられた。パリではホー・チ・ミンの活動は行詰つてはいなかつた。それなのに、ホー・チ・ミンは一通の手紙を残して、親しい友人にも下宿先の家族にも行先を知らさずに忽然として姿を消した。彼が残した手紙はホー・チ・ミンの優しいヒューマンな心とパリを去る心境とをよく表わしている。

「愛する友よ、私たちは長いこと一緒に働きました。私たちは、種族もちがい、国もちがい、宗教もちがうものた

ちですが、一つ家族の兄弟のように愛し合っています。

われわれは、植民地主義者の残虐行為という同じ不幸をともにこらえています。私たちは、われわれ人民の解放と祖国の独立とを再び獲得するという共通の理念のため闘っています。

私たちは、孤立して闘っているではありません。なぜなら、私たちは全人民に、フランスの民主主義者に、また、わたくしたちに味方する真のフランス人たちに支持されているからです。

私たちの共通の仕事である「植民地諸民族連合会」とパリアは、好い結果を生みました。そのおかげで、フランス、真のフランスは、植民地諸国に起っていることをハッキリと理解しています。フランスは、今では、強慾な植民地主義者が、想像に絶する罪悪を犯してフランスの名声をけがしていることに気付いています。私たちの仕事は、わが人民を覚醒させました。と同時に、わが人民もまた、自由で、平等で、博愛的なフランスがあることを認めています。けれども、私たちはもっとよくしなければなりません。

われわれは何をなすべきでしょう？
こういった質問をあまり機械的に出すことは出来ません。めいめいの国の特殊な情勢によらなくてはならないからです。

私としては答はハッキリしています。国へ帰って、大衆とともに働き、彼等を啓発し、組織し、統一し、訓練して、彼等が自由と独立とのために闘うよう手助けをすることです。

おそらく皆さんの誰かが、この同じことをなさるべきです。またできるでしょう。その他の方々は、われわれの現在の仕事すなわち「植民地民族連合会」を強化し、パリアを發展させることを続けてなさるべきです。

親しい友よ。みなさんにお別れします。はなれていても私の心はいつもみなさんのおそばにいます。どうぞ、私がおかにかにさよならを言わないことをおゆるし下さい。私が嚴重に監視されていることを御存知でしょう。この手紙がとどくころ、みなさんのグエンはフランスをあとにして、少くとも二十四時間はたっているでしょう。

私の同国人のダイが、Bさんに、新聞事務所の鍵、連合会や新聞のいろんな文書や文献、ならびにその資金をお返しするでしょう。事務所の部屋代は年末まで払ってあります。印刷代も払ってあります。だれにも借金はありません。図書館の本は右のひきだしの中にあります。休日に会員に貸出したものを除き、すべての貸出本が入っています。

要するに、私が出発する前に万事はちゃんとしておきました。私は手紙をかきはしますが、みなさんがもぐっているときは通信も難しいので、お約束はできません。どうぞ、私に代ってフランスの友人たちに握手して下さい。

さて私の姪や甥に一寸言わせて下さい。お前さんたちはおじさんが大好きだが、おじさんもお前たちが大好きだ。全くおじさんの子供みたいだ！ お前たちが好い子だってことをベトナムの子供たちにはなそう。お前たちの代りにかれらと握手しよう。きつと長いことお前たちはグエンおじさんに会わないだろうし、いつもしたように、おじさんのひざの上や背中に登ることもできないだろうし、また、おじさんがアリスやポールに会うのもずっとこのことだろう。おじさんが今度会うときは多分、おじさんはおじいさんになっているし、お前たちは、母さんや父さんのような大人になっているだろう。そんなことはどうでもいい。おじさんはいつもお前たちをおぼえていよう。お前たちも、いつもおじさんの可愛いアリスと可愛いポールでしょう。

好い児におなり！ よく勉強おし！ 母さんや父さんの言うことをききなさい。小犬のマリウスをぶってはいけ

ない。大人になったら、お前たちの親たちのように、グエンおじさんのように、ほかのおじさんたちのように、お国のために闘うだろう。

わたしの可愛い姪と甥！ 私は二人ともに心をこめてキッスをする。私の代りにママにキッスしておくれ。

グエンおじ⁽²⁾

(傍点訳者)

(1) ファン・ヴァン・チュオン (Phan Van Trong)——一八七八〜一九三三年——は、グエンに協力してパリで出版された Vietnam Soul に執筆した愛国的インテリであった。帰国後、彼は新聞紙 Annam の編集人で革命思想を宣伝するため、ベトナムで始めて「共産党宣言」を出版した人である。

(2) この手紙は 'Tran Dan Tien: Glimpses of the life of Ho Chi Minh, President of the Democratic Republic of Vietnam, 1958, p. p. 28~30. から訳出。

II

次に一九二三年夏、ホー・チ・ミンがパリを去る前に、ホー・チ・ミンと数回会見し、その感化で、一九二五年にフランス共産党に入党し、一九二九年末ベトナムへ帰ったブイ・ラム (ホー・チ・ミンより十才以上歳下) の「パリでホーおじさんに会う」と題する回想記を見ることがにしよう。当時のパリの雰囲気、ホー・チ・ミンの人的魅力、仕事ぶり、他人への思いやりが察知される唯一つの有力な資料である——

「ハイフォン州カナ村では、住民の大部分が船員でありました。たくさんの旅行をし、見聞もひろく、また、安い賃銀で酷使され抑圧されていきましたので、ほとんどが反仏的でした。私はこの村の生れで父が船乗でしたから、

パリにおけるホー・チ・ミン

幼少の頃からフランスの植民地主義者を憎んでおりました。十五才のとき、私はシャルジュール・レユニ社の船の船員として働きフランスへ渡りました。この船が抜錨して外洋に向ったとき、私は意気揚々たるものがありました。母国よ！ さようなら！ ここには貧乏と苦しみしかない！ お前には永久におさらばだ、二度とおめにかかるまい！ と独りごちました。

船がマルセイユにつくと、私はただちに革命的雰囲気に捲きこまれました。時はちょうど一九一九年の末で、同年初頭ロシア革命を支援しておこった黒海でのフランス艦隊の叛乱が人民の心の中に生き残り、革命の波が遠く広く波及していました。私はフランスの水兵がプロレタリア革命を歓迎して赤旗をかかげた話をきいて深く感動しました。彼等は司令官もろとも将官たちを縛り上げて船倉にとごめ本国へ引返し、サイレンを鳴らしてトゥーロンへ入港したのです。ときの仏首相クレマンソーは、激怒して解隊を命じたので、水兵等は商船にのりくみましました。これら商船の船員たちは彼等を黒海の英雄として歓迎し、かつ、ロシア革命を歓呼して迎えました。花粉を運ぶ蜂さながらに、この黒海物語りをさいはてまで伝播したのです。

右の物語をきいて私の心には新しい思想が徐々に芽生えました。フランスへの途次われわれは、ベトナム以外のすべての国がうまくいっていることを知りました。日本には自分自身の船があるのに、「安南人」だけは何ももっていないなかったので、悲しくもあり憤うろしくもありました。しかし、われわれは世界には今や社会主義革命、レーニンとプロレタリア権力のあることをしたのです。プロレタリアとは一体誰だろう？ 私自身だってその一人なのだ！ 私はたちどころにソビエト同盟につながりをもっていると感じて大胆になりました。

その上もう一つの事件がいつそう深い感銘を残しました。忘れはしません。一九一九年という年は、実にたくさ

んの事件が起りました。この年の六月に、帝国主義者どもはベルサイユ会議を開いて、植民地市場を彼等の間で再分割しました。ところが彼等は突如としてグエン・アイ・クオックによりベトナム自決の要求を突きつけられました。フランス人はこれを爆弾とよび、われわれは雷鳴といっておりました。この春の雷鳴は、われわれを包む濃霧を消し去って、心中深く眠っていた種子を発芽させるのに役立ちました。われわれが有頂点になったのは、生計をたてるため祖国をはなれなければならなかったわれわれのすべてが、祖国を愛し、その独立を待ちのぞんでいたからです。フランスの首都にあつて、また「列強」の会議において、敢然と立上つて民族の権利を主張し、かくして世界中の与論をかきたてた人物を何びとも賞讃しないではおかないでしょう。その当時、ベトナム人が出会えば、きまつてグエン・アイ・クオックについて語り合いました。グエン・アイ・クオックの名前には、驚くべき魅力がありました。この名前を口にするとき、われわれは大変好い行いをし、何ものかに刺戟されているように感じました。

私はマルセイユを去つてル・アーブルに行き、北フランス、カリブン諸島、マルチニーク、パナマ、エクワドル、ペルー等々、時にはサンフランシスコやカナダにまで往復する大西洋横断航路の船会社で働きました。四・五ヶ月の航海のおわり毎に、数十名の同胞と再会し、グエン・アイ・クオックの独立要求について語り合いました。この語り合いによつてわれわれの心の中に点された火は、焰となつてアカアカと燃え上りました。かつて私は、ペルーでベトナムに長年いてベトナム語を流暢にはなす中国人にあつたことを思い出します。彼は私がベトナム人だと気づくと私からはなれえず、ベトナムに何が起っているか、ベトナム人たちはまだ飢えたり苦んだりしているか、どうかを訴ねました。わが国に対するこのような愛情は、いよいよ私を祖国に結びつけ、また祖国に対するいっそう重い責任を感じさせました。

一九二一年。フランス政府はマルセイユで植民地博覧会を開きました。これは資本家の植民地への投資を勧請する企画をもつものでしたが、アルベール・サローが立案した系統的な搾取政策に呼応するものでありました。この博覧会では、植民地は蔑視され、ベトナムは人力車で代表されました。しかし、フランス人興業主たちは、進んで人力車夫として雇われるベトナム人を見つけてくることは出来ませんでした。そこでの映画は、子供らが寝台の上で通じをし、大人がその排泄物を食べるシーンだけでした。ところがフランスの諸都市を訪問していたカイ・ディン帝とファン・キムは、「開化と保護国に対する感謝」をベラベラと喋りつづけました。われわれは大いに憤慨し、一度ならずその映画館に放火するところでした。まさにこの時、われわれは、フランス植民地主義者の植民地博覧会、人種差別および搾取政策についての批判記事を読んだのです。これらの記事は悉く、親愛なるグエン・アイ・クオックの署名するところでありました。

一九二二年七月、私が南米から帰って間もなく、われわれの労働組合の係りの一フランス人が、グエン・アイ・クオック発行のル・パリアの月号をくれました。私は頭に火がついたように夢中になってそれをむさぼり読みました。読みおえると直ぐ、私は飛び出して若干の同胞を見つけだして、かわるがわるに読み合いました。涙があふれ出しました。この短い簡潔な記事が、祖国を喪失し、抑圧され搾取されている勤労者たちの心魂をかくまで打とうとは！ これらの記事は、われわれを行動へかりたてました。しかし、われわれは何をなすべきかに戸惑ってしまいました。それからグエン・アイ・クオックに会わねばならないと気づいたので、相談の結果、私が彼に会いにくことになりました。よほど前に私は彼を訪ねようとしたことがあったのですが、番地を知らないのです。パリで迷い子になるかもしれないと心配しました。だが、友達が私を選び、ル・パリアを手にしたのだから、私は大いにハリ

キッテ出かけました。グエンは、われわれが彼を探すであろうことに気づいているのだから、彼に会えさえすれば、パリでは何もおそれるところはないと思いました。

私は汽車に乗込み、午後一時にパリに着きました。停車場をでて、私は黄色人に会うごとにル・パリアをつき出して道をききました。私は黄色い皮膚の人はだれでも植民地の人たちであり、パリにいるその人たちは、ル・パリアを知っているに違いないと考えました。もちろん、多くの人たちがその道を教えてくれました。私は六区にあるマルシェ・デ・パトリアルシュ街へ行くことができました。この通りは古い通りでル・パリアの事務所は、小さな市場の前通りになりました。事務所の前には、郵便箱がありました。この事務所は地階にあつて二部屋からなっております。そして二人の北アフリカ人が封筒をあけたり、書いたりして忙がしく働いておりました。

彼等は温かく私を迎え、待つようにいって仕事をつづけました。『グエンはこれをよんだらうか』『グエンはこれを論評しただらうか』と時々、彼等が互にいうのを耳にしました。グエンを非常に尊敬しているらしく思われしました。事務所の中を見まわすと、長いテーブルの上には、英・仏の外国語でかかれた沢山の新聞が積みあげられ、数脚の椅子がおかれ、また壁には大きな地図がかかっておりました。私はそつと立上つてそれを見に近よりました。「インドシナ」としてされた箇所には指や鉛筆のあとが、色をにごし、紙をテラテラにしていました。だれかがここに屢々立つてあの国のことを思ったのに相違ない！ 私もまた、しばらく佇立して『ベトナムはパリからはとても遠い、私の同胞たちはどうしているだらう』と考えました。

私はとても長いこと待つづけました。五時になつて北アフリカ人は、グエンはその日は事務所には帰らないだらうといつて、事務所からは一キロ余りの十三区のコブラン通りの宛先を教えてくださいました。そこで私はコブラン通

りへ行き六番地を探し、二階へ上って行きました。私の心臓は激しく鼓動しました。グエン・アイ・クオックはどんな人で、どんな風に私を迎えるだろう。私はドアをノックしました。すると足音がしてドアがあき、三十才位の背の高い痩せて青白い顔の男が、ほほえみながら私の前に立ちました。

“もし、どなたをお訪ねですか”（当時私は非常に若くて二十才以下でした）

“私は、グエン・アイ・クオックさんにお目にかかりたいのです。”

“私です。どうぞお入り下さい”

おお！ グエンは親しげにほほえんで私の前にたち、ドアを広くあけて私を招じ入れました。私はしばらく立ちたまま、つらつらと顔をのぞきこんで、自己紹介する前にドアをあけた人と同一人であるか否かを見きわめようとしたのおぼえています。それはまぎれもなくその人でありました。古っぼけた粗末な黒い服をきて、痩せてはいたが、その眼ときたら、特別大きく輝かしい眼の人でした。私は彼について部屋に通るとたちまちくつろぎを覚えました。それは質素な家具のおかれた一室で、一隅に机がありました。たくさんの新聞や雑誌、本がおかれてありました。そばには鉄製の寝台と箆筒がありました。ただ清潔で明るくくつろげる部屋でありました。グエンは私の出生地のことや私の訪問の目的や、私の船の航海日数や私の暮しぶり、また私の生活が苦しいかどうかを質問しました。そこで私ははじめて彼もまた船員暮しをしたことを知りました。彼が船乗の通話を話すのも不思議ではありません。彼は非常にたくさんの旅をしたことがあり、私の行ったところは殆ど皆知っております。彼はその場所を見たとは言わなかったが、そこについての質問の仕方が、よく知っていることを示しました。彼は、これらの国々の人々の生活に特別関心をもっておりました。ついで話題はベトナムのことになりました。彼は私がサイゴン

から出帆したことを知ったので、サイゴン、ベン・タン市場、埠頭、荷揚人足、荷馬車等々について尋ねました。物思わしげなまなざしで、些細なことも詳しく質問して、熱心にきき入りました。われわれは大いに語り合いました。そして知らぬ間に時間がたちました。ぢき午後九時になるので私は辞去しなければなりませんでした。翌日曜日の朝また来るようにと彼はいいました。

私は自分の部屋に帰り、思いにふけりつつ寝につきました。グエンは非常に著名であったにも拘らず、極めて質素で謙遜で、親しみ深い人でした。私はグエンに会ってからいよいよますます彼を尊敬しました、賞讃しました。われわれ船乗は優秀な船長をよく理解しかつ尊敬します。ですから私は、かつて誰にももたなかった全面的信頼を彼についてだけもったのです。彼となら、怖れることなく、どんな困難にも堪え得たであります。彼には特別な魅力があったので、彼に会うものは誰でも一度は訪ねて一緒にいたいとねがうのが常でありました。

私は、翌朝八時にまたグエンを訪ねました。グエンは同じ黒い粗末な服をきて私を待ってくれ、一緒に散歩に出かけました。われわれは多くの通りを抜け、非常に長いモンジェ通りに沿って歩きました。私はグエンがたいへん頑丈な踵の、長もちする種類の古い短靴をはいているのをみました。歩きながらおしゃべりをし、約一時間後に私を美術展覧会につれて行きました。全くのところ、当時私はまだ若く、絵のことなど何も知らなかったので楽しめませんでした。しかし彼と一緒に居ることが嬉しいのでした。この展覧会には何百という絵が陳列され、沢山の人が入っております。グエンはそこではよく知られていて、沢山の人が握手に来たり、目礼したりしました。彼は絵を非常に長く、また注意深く觀賞し、フランス人の友人たちと批評し合いました。彼の批評は、美術やフランス文化にも造詣が深いことを示しております。私はグエンが幾度もヴァイアン・クーチュリエと一緒に、一つの絵

を見ていたことを思い出します。それから数年ののち、私がユマニテやベトナム・スールを印刷していた資本家ダ
ン・ジョンの印刷所に働いていた時、ヴァイアン・クーチュリエには屢々会いました。彼は本物のインテリで、謙
遜で学識があり、かつまた誠実な人で、植民地には大変関心がありました。その時はじめて、私は彼がグエンの親
友であることを知りました。われわれは、展覧会で十一時まで二時間ついやしました。パンテオンは展覧会のまん
前でしたから、われわれはそこへも入りました。それからグエンは、デ・シャルム通りの中華料理店に私を案内し
ました。われわれは魚のソースと豆もやしそえの牛肉のソテーを喰べました。私はとても久しぶりで懐かしい生れ
故郷の料理を味いました。食後歩いて家に帰りました。

室内では、グエンは床に藁をひき、枕代りに本をひとところ積上げて、二人は横になって休みました。彼は自分
の暮しぶりについて聞かせてくれました。朝には賃仕事の肖像を店屋にたのまれて作るのですが、糊口をしのぐ
に足るだけ儲けました。彼の生活は、月給を貰っているわれわれよりもより苦しいものでありました。しかも彼は、
その所得の一部を何とかやりくりして本やル・パリアの印刷にあてておりました。そして午後には記事を書いたり
なおしたりしてル・パリアの事務所で働きました。彼はまた、ユマニテやラ・ヴィー・ウーブリエールのような新
聞や雑誌に寄稿しました。ル・パリアの職員たちは悉く革命運動にたずさわっていて、空いた時間にル・パリアの
事務所に働きに来る植民地の人々でありました。これが事務所に門番もタイピストも見当らぬ理由でした。夜にな
るとグエンはクラブに出かけて哲学、経済、政治、社会、文化に関する事柄につき討論したり、また国立図書館に
行くのでした。そのみか、フランス共産党の町の細胞の集会にも出席するのです。このように非常に多忙であ
ったにもかかわらず、日曜日には散歩に行ったり展覧会をみに行ったりするのでした。その次にパリに旅行した時

に、グエンはまた私を絵の展覧会とルーブル博物館につれて行ってくれました。彼はパリを殊に工場や労働者の住宅のある郊外については実によく知っておりました。これらの郊外は相互に連結されており、フランス共産党の影響下にあるので、フランス人が「赤いベルト」と呼んだ円を形成しておりました。グエンはここで活躍し労働者たちに接触していました。

午後おそくなって私は彼と別れました。出発するに当って彼が忠告した多くの事柄の中、何よりも私が感銘し絶えず思い出したことは、次の言葉です。「奴隷とされた民族の任務を絶えず心に銘記しなさい。われわれは互に愛し合しい団結しなければならぬ。われわれはフランスの労働者や人民並びに植民地の人民とも団結しなければならぬ。われわれはみんな、同様に圧迫され搾取されている貧乏な人民なのである」

私がル・アールへ戻ると、友人たちが会いにきたので、私が何もかも話してやったら彼等は大変喜びました。その後、グエンの忠告にしたがって私は新聞を母国やベトナム人居留民のいるカレドニアやレユニオン島のような処へもち込みました。われわれは、ル・パリアの支援基金に応募し、何百部ものル・パリア、ユマニテ、ル・ボルシェヴィークを購入して母国へ送りました。かつてマルチニークへの航海で、私は三人の原住民をかくまっつて、警察に知られずに密入国させてやりました。われわれ船員にとっては、新聞や人間を密輸入するのはたやすいことでありました。

一九二三年四月、私の船はまたル・アールに入港しました。私は航海中会いたくてたまらなかつたグエンに会おうと急行しました。

その当時、一九一九年に勃発した労働者運動は沸き立っておりました。ル・アール地方の何万という労働者は

何カ月も罷業をしており、警官と流血の衝突をしておりました。ベトナムでは、フランス帝国主義者が、われわれ同胞の搾取を強化し、かつ窮乏を深刻化しておりました。河川の堤防は決壊され、飢饉につぐ飢饉が起っておりました。全くの窮乏と破産に追いやられて人民は、南ベトナムやニューカレドニアのゴムのプランテーションに雇われてゆかねばなりません。この間フランス船は絶えまなくフランス本国へわれわれの米を運びつづけておりました。このようにわれわれの米が植民地主義者によって盗まれている一方、同胞が餓死しつつあることに私は悩まされました。このことをグエンに告げようと私は決心しました。

私はゴブラン通りに行きましたが、グエンがいないので新聞の事務所へ急いで行きました。彼は私の知らないアフリカ人とはなしをしておりました。私をみとめると彼はほほえみ、私と握手し、セイボという名のアフリカ人に引きあわせました。私の最初の言葉は、ル・パリアが定期的にベトナムに伝達されていることを報ずることでありました。するとグエンの顔は喜びに輝き、さらに一層はげむようにいいました。それから私を家に伴い、私の健康や、ル・アーブルの船員たちのそれや、また私が最近訪れた方々の場処や母国における状況につき質問しました。彼の思いやりのある、また親しみ深い態度は兄弟のそれでありました。植民地主義者がわれわれの米を盗んでいるため、われわれの同胞が餓死していることをはなしたとき、グエンは長い間身動きもしないで黙っておりました。

私は次の部屋を使っているのは同国人の弁護士ファン、ヴァン、チュオン⁽¹⁾であることをはじめて知りました。グエンの部屋はこの弁護士が譲ったらしかったです。ファンが愛国的インテリであり、やはり共産党主義を知らうとしていたが、むしろ学究であったのに反し、グエンは理論家でありかつ闘士であって、勤労大衆の中に深く入って行く人でありました。のちに私はファンと単独に会いましたが、彼はグエンを非常に賞揚しました。彼は私に、前

インドシナ総督で現在は植民相であり、植民地主義の急先鋒であるアルベール・サローは、かつて彼の役所にグエンを呼びつけ、齒を喰いしぼり乍ら、手をつき出し、近づけてぐるぐるふりまわし、敵手を粉碎しようとする気構えで、「フランスには十分な権力があるから敵は罰するぞ」といったと語りました。かかる脅迫にもかかわらず、グエンは活動をつづけて行きました。この植民相が、グエンを買収しようとした時、面と向ってグエンはいいました。「私は「特権」などは要らない。私は仕事をして生活をたて得ているから何物も欲しくはない。ただ祖国の独立を要求するだけだ」と。全能のアルベール・サローは、恥入ったばかりか、ベトナム民族、植民地民族、特にフランスの人民やフランス共産党を味方に行っているグエンに対しては無力でありました。

私の船は屢々航海したので、パリへは滅多に行かれなかったもので、時々彼に手紙をかくしかありませんでした。私は次のように手紙でききました。「私はマルクスのことを書いている本を何冊かよみました。彼はどんな人なのか知りませんがどうぞはなして下さい。」私はすぐに返事を貰いましたが、その中で、彼はマルクスばかりでなくマルクス主義についていってくれ、もっとマルクス主義の本を読むようにすすめました。そのうち私はその本をよくよみました。そして難しい言葉にぶつかると、辞書を引いたりグエンに説明を求めたりしました。

一九二四年六月、フランス共産党は、マルセル・カシャンやヴァイアン・クーチュリエのような指導者と一緒に、グエンをフランス下院総選挙の候補者にたてました。これら候補者のリストは新聞紙上に発表され、また街角にはり出されました。われわれは有頂天になって候補者のリストがはりだされている処に立どまりました。グエン・アイ・クオックの名前をよむと、われわれは、われわれプロレタリアートの、ベトナム人のまたベトナムの名前をよむかのように感じました。フランス共産党は、グエンを下院に立候補させて、フランス労働者階級が共通の敵たる

資本家に対する闘争で、植民地の労働者階級と連帯していることをいおうとしたのです。資本家の下院に当選することそれ自体が目的ではなくて、資本家の仮面をはぐにあったのです。この時はじめてフランス共産党は独力で下院に候補者をたて五百万票中一百万二百票を獲得しました。もちろん、グエンはフランス市民ではなかったので、フランス下院に当選はいたしませんでした。

私がグエンに最後に会ったのは一九二三年の末でした。私は一九二五年にフランス共産党に入党しました。……一九二九年半ば、モスクワからの帰途チャンフーは⁽²⁾パリにとどまりました。彼はグエンに会ってベトナム人共産主義者グループに宛てられたコミンテルンの連帯アツピールを手渡す任務をゆだねられておりました。ある日のと、彼は私と一緒にパリ・コミューンの闘士のお墓にお詣りに行きました。チャン・フーは黄埔軍官学校でグエンからはじめてパリ・コミューン戦士の大目的につき聞かされたと言りました。グエンは到るところで闘士を訓練するのだな、若し彼に会わなかったら私は一体どうなっていたろう」とひそかに思った次第です。私がベトナムを去った日、私は二度と再び母国へは帰るまいと決心したことを思いました。私は心に痛みと恥を覚えたが、如何になすべきか途方にくれておりました。そしてグエンにめぐり会ったのです。彼は私に、奴隷となつた人間の任務を、思いしらせ、階級解放の道に、密接に結び、ついで、民族解放への正しい道を指向してくれました。それから私の友人たち、労働者及びフランス共産党のおかげで、私は共産主義者となりました。それから後は、どんな犠牲を払つても母国へ帰つて、奴隷化された人間の、共産主義者の任務を成就しよう、という大望が、昼となく、夜となく私の心を占めました。その年の末に私はベトナムに帰つたのであります」(傍点訳者)

(1) Iに出てくるファン・ヴァン・チュオンと同一人。Iの註(1)を参照。

(2) チャン・フー (TRAN PHU) はホー・チ・ミンの弟子。一九三〇年インドシナ共産党創立後、同党の第一書記に選ばれたが、同じ年のゲ・チンの反乱でフランス官憲につかまり拷問の結果獄死した。

(附記) 「私のホー・チ・ミン研究」——本誌第二号(一九五四年)に私は「ホー・チ・ミン評伝」と題する小稿を寄せた、この年の七月二十日にジュネーブ協定が成立し、十七度線の北にベトナム民主共和国の独立が承認された。記念すべき年であった。日本では、この頃から、ベトナム問題に関心がもたれるようになり、日本ベトナム友好協会の成立をみた。しかし、ホー・チ・ミンが戦前からその名を知られているグエン・アイ・クオックと同一人であるかどうかにつき判断をつけかねる時期であった。ベトナムから帰還した小松清氏(仏文学者)が書いた『ベトナムの血』と題する小説を見ても、同氏がパリでフランス社会党関係の会合でグエン・アイ・クオックに会い、ハノイでもホー・チ・ミン主席に会っているのに、ホー・チ・ミンとグエンとは別人であろうと書いていた。

私がホー・チ・ミンの名を初めて聞いたのは、小松氏と同様ベトナムからの帰還者であり、彼の親友でもあった小牧近江氏(近江谷駒先生のこと)の口からであるが、小牧さんはハノイでホー・チ・ミン主席に会わなかったということであった。私の前記評伝では、中国人の書いたものに依拠して、グエンはホーと同一人であると断定しているが、その通りであった。

社会学部における私の担当課目は、「世界経済論」と「国際社会・労働運動史」との二課目であったが、私はこの二つを結びつけて研究した。全体と部分、一般と特殊の関係では、植民地経済が前課目の特殊であり、民族解放運動史が後課目の部分に相当した。私の世界経済論は、レーニンの帝国主義論であるが、この体系からして、植民地民族解放運動史を国際社会・労働運動史と同列においても論理的矛盾はないからである。

私は、一九六一年ベトナム民主共和国平和委員会の招きで、日本ベトナム友好協会の代表としてハノイを訪ねた。ジュネーブ協定成立七周年の記念集会に参加するためであった。同行者は、当時日本ベトナム友好協会理事長の坂本徳松君、理事の斉藤玄彦君、野波勝三郎君、加藤邦博君の四人であった。

この年は、北のベトナム民主共和国で「社会主義革命」が開始され、南でアメリカの「特殊戦争」(侵略戦争)が開始されたという意味で記念すべき年であった、この前年すなわち一九六〇年、ベトナム労働党は第三回全国代表者会議(大会)を開催し、社会主義五カ年計画を策定し、六一年からその実施に入った。同じ年十二月二十日には、南ベトナム解放民族戦線が成

立し、六一年から解放戦線による抗米救国戦争が開始されている。

一九六〇年のベトナム労働党第三回全国大会はまた、党中央党史研究委員会から『ベトナム労働党闘争三〇年史』を公刊することを決定し、早くも翌六一年にはその前半（一五年間）の部分を発表した。それまでベトナム民族解放運動の秘密部分であった党史の公表は、ベトナム研究の上に多大の便宜を供与することになった。その上、同じく党の決定により、『ホー・チ・ミン選集』が発行された。それは、ベトナム語、中国語、ロシア語、英語、仏語で出され、異国人のホー研究にも尠なからぬ便宜を供与した。

私は、戦前にもインドシナ研究（ベトナムはその一部）を行ったものだが、それは主としてフランスの植民地主義者の文献によったし、またよらざるをえなかったから、実証的研究の域を超えることが出来なかった。しかし今やマルクス主義者の諸文献によってベトナムの本格的な研究を再開出来るようになったのである。

そこで、私は「ホー・チ・ミン研究会」を組織した。一九六四年、私がハノイを訪ねてから三年目のことである。同じ年、法政大学社会学部では、大学院に社会学専攻科を発足させることが出来たので、私は社会学部出身の三尾忠志君の協力をえて、大学院内に講座とは別に任意の研究会をつくったのである。参加者は、大学院学生の有志、日本ベトナム友好協会関係の私の友人若干であった。同時に、私はベトナム民主共和国の文化外渉部とも連絡して、資料の入手をはかった。研究会は月一回位開催し、ホー・チ・ミン選集（英訳本）を分担して読むことにした。この研究会は諸般の事情で中止の止むなきにいたったけれども、二カ年半は継続したように思う。成果として私の手元に残ったものは、

▽逸見「ホー・チ・ミン研究の若干の文献について」（ホー・チ・ミン研究会報告第一集——騰写刷）

▽三尾「越南民主共和国歴史学研究所機関誌『歴史研究』綜目録」（ホー・チ・ミン研究会「資料紹介」(一)、(二)——タイプ印刷）

▽三尾「ホー・チ・ミン選集第一巻について」——時代的背景の考察と内容——（ホー・チ・ミン研究会報告第二集——騰写刷）

この外、私がハノイで寄贈されたホー・チ・ミンの『獄中日記』を三尾忠志君がゼロックスで複写し、これを法大大学院国文学専攻科出身の上田三郎君と協力して邦訳し、二人が胡志明『獄中日記』抜抄を作成し、これを研究会で発表したことがあり、三尾君がホー・チ・ミン伝の外国語文献を批判紹介したことがある。

この研究会で最も熱心に研究をつづけられたのは三尾君で、同君は研究会の書記の役を勤めて下さった。最後に、この研究会の直接的成果ではないけれども、当時「研究会」に参加した方々または好意をよせられた方々のうち、最近個人的労作を発表された方があるので、それを紹介しておきたい。

▽坂本徳松・大類純編訳『ホー・チ・ミン解放思想』（一九六六年、大和書房発行）——本書は英訳ホー・チ・ミン選集一・二・三・四巻の中からホー主席の論文、講話、手紙、アッピール等を取捨選択して、第一部——パリ在住——海外での活動——祖国独立（一九二二—一九四五）、第二部——抗仏戦争——勝利——ジュネーブ協定（一九四五—一九五四）、第三部——祖国復興——建設——対米闘争（一九五四—一九六六）の三部に分つて、年代順に併列した邦訳本である。いわば訳者の好みにしたがったホー・チ・ミン選集の抄訳本であるが、巻頭の坂本徳松署名の「ホー・チ・ミンの人と思想と行動」はよく書いており、本書の訳文全部が、平易な口語体で書かれているのが特徴である。

▽齊藤玄・立花誠逸共訳、ジャン・シエノー著『ベトナム民族形成史』（一九七〇年「理論社」発行）——これはソルボンヌ大学教授シエノーの『ベトナム民族史』の一九五四年版英訳本の邦訳である。シエノーについては、私は「アジア・アフリカ研究におけるマルクス主義的課題」と題する論文（本誌第十五号）で紹介したことがあるが、本訳書巻頭には「日本版に寄せて」のシエノーの序文が附され、巻末には「解説にかえて」の齋藤玄彦君の、I「中ソ対立のなかのベトナム」、II「ベトナムの民族精神の形成について」、III「ホー・チ・ミンの死、その生涯」と題する三つの論文が附加されている。

▽真保潤一郎訳、ベトナム労働党中央党史研究委員会編著『正伝ホー・チ・ミン』（一九七〇年、毎日新聞社発行）——本書は一九七〇年ホー・チ・ミン主席の生誕八十年を記念して、党史研究委員会がその成果を党機関紙「人民」に発表した紛れもないホー・チ・ミンの正伝である。この伝記の外、同じく「人民」の別号に発表されたポー・グエン・ザップの「忘れられない日々」とファン・バン・ドン、ホー・チ・ミン主席、民族の成果と気迫、時代の良心」と題する記念論文が附加されている。ベトナム語原典から訳出され、それには日本ベトナム友好協会の加藤邦博、加茂徳治、野波勝三郎の三君が協力している。本書に優るホー・チ・ミン伝がまだ出されていないことは、本訳書の表題の示すところである。

最後に「ホー・チ・ミン研究会」で活躍された三尾忠志君の最近の労作を紹介しよう。同君は、法大大学院博士課程在籍中は、主として東南アジア諸国（カンボジャ、フィリッピン、ベトナム等々）を分担し研究されたが、今は、ホー・チ・ミンの民族問題は農民問題に帰着する」という命題に立って、この地帯の農業・農民問題の研究に没頭されている。ベトナム民主

共和国についても、現在の社会主義建設の実情を知る上に不可欠な、労働党や政府発表の諸文献の英訳資料を手に入れ、私のベトナム研究のつづきを追求して下さっている。私の手元へとどけられた三尾君の論文には左のようなものがある。

- ▽三尾忠志著『北ベトナムの農業問題』(一九六九年「国際情勢」二十七号・二十八号——法大大学院「博士課程」の論文)
- ▽三尾忠志『ベトナム革命の戦略・戦術論』(一九六九年「国際情勢」第二十九号)
- ▽三尾忠志「新たな重要段階に入った北ベトナムの農業合作化運動」(一九七〇年一月「国際情勢研究会」発行の単行本——タイプ印刷——菊版一二二頁)
- ▽三尾忠志『北ベトナムの農業問題』(一)(二)(一九七〇年九月「共産圏問題」第十四卷第九号及び一九七一年四月「共産圏問題」第十五卷第四号)
- ▽三尾忠志『北ベトナムの「三革命」路線についての若干の考察』(一九七〇年十一月「共産圏問題」第十四卷第十号)
- ▽三尾忠志『北ベトナムの農業労働生産性についての若干の考察』(一九七一年一月「季刊国際情勢」所収)